

大阪北部地震災害に思う

2020年4月
石原勝巳氏の随筆を転記

大阪北部で、本日午前8時ごろの通勤・通学時に震度6弱の直下型地震が発生した。社会インフラは相当な被害を受けたが、豊臣秀吉築城にかかる大阪城は熊本城と異なり、かろうじて無事だった。最近気になっていることがある。それは日本全土でたびたび地震が発生していることだ。何らかの予兆だろうか。南海トラフ地震の予兆だろうか。

いつも思うことなのだが、日本人は地震について、誤解を恐れずに言えば非常に楽観的な（慣れっこになっている）民族である。したがって、「地震は忘れたころにやってくる」という地球物理学者の寺田寅吉の名言どおり、過去の地震のことが宙に浮いてリセットされ、その場しのぎの被災者行動が特徴的だ。つまり防災対策は何も持ち合わせていないということだ。

メディアは、各社とも特番を組み、地震の状況、特に人的・物的被害状況を伝えている。人的被害で、とりわけ最も多く時間を割いて情報提供していたのが、登校中の女兒が倒壊したブロック塀の下敷きになって理不尽な死を遂げたことだろう。この場合の理不尽さはこんなにも若く未来が託されている小学生がなぜこの一瞬で人生の幕をおろさなければならなかったことに尽きるだろう。非業の死でも夭折でもない。その人のみに襲いかかった災難死である。当該被害女兒のこれからの無尽蔵な人生を、学校のブロック塀がつまり彼女の未来をブロックしてしまったということである。

思い起こせば、阪神大震災のときのことである。倒壊した家の下敷きになって動けなくなった女子中学生が、家に火の手が迫ってきたとき、必死で助け出そうとしている母親に向かって、「おかあちゃんは、早く逃げて」と叫んだという。そしていよいよ火が迫ったとき、母親の背中に小さな声で「さよなら」って……。人生ぎりぎりのところで、「さよなら」といえる。そんな母へのおもいやりが素晴らしいし、それが堪えられないくらいいいじらしく、悲しい。今回の女兒は最期にどんな言葉を発したのだろうかと思うと、心がずたずたに痛む。やはり「おとうさん、おかあさんありがとう。さよなら……」だったのだろうか。

こういう事例をまえにすると、抽象的であれ具体的であれとにかく言われている安全・安心がすべて空虚に見えてしまう。われわれはいついかなるとき・場面でも隣に災害が常に潜んでいることを認識しなければならないのと思う。しかし、どういうわけかそれを忘れるというか見過ごしてしまう。それが人間の特性（災害と言う名の不幸を遠くに追いやる意識）

といえ言えるのかもしれない。

それなら、いっそ大愚良寛がいみじくも言ったように、災難に遭えば逃げようとせず従容として受け入れるというのも妙法であろう。人生は不条理なものだから。それを覚悟しながら。

(注)

非業（ひごう）の死：少し大げさな表現で寿命の前に死ぬこと、「業」は前世の因縁、運命

夭折（ようせつ）： 将来を渴望されていた才能ある人が若くして死ぬこと

大愚（だいく）： 非常に愚かなこと

大愚良寛： 自らを大愚良寛と称した良寛さんの言葉

「災難に逢う時節には、災難に逢うがよく候。死ぬ時節には、死ぬがよく候。」

問題は自分自身のなかにある、余計な思惑を持たなければどんな難事も難事でなくなる、
と言う。

従容（しょうよう）： ゆったりと落ち着いているさま

妙法（みょうほう）： うまい方法